

## 太祖神社所蔵の大陸系石製香炉

江上, 智恵  
久山町教育委員会

<https://doi.org/10.15017/1508399>

---

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.47-55, 2015-03-31.  
九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室  
バージョン :  
権利関係 :

# 太祖神社所蔵の大陸系石製香炉

江上 智恵

はじめに

平成二十六年秋、九州歴史資料館で特別展『福岡の神仏の世界 九州北部に花開いた信仰と造形』が開催された。大陸文化の流入や対外交渉の窓口としての福岡という点を支点とし、信仰に関わる造形を集約した展覧会であり、古の信仰遺品から、原風景を感じさせるものであった。<sup>①</sup>

この展覧会で、初めて出品されたのが篠栗町の若杉山山頂にある太祖神社上宮所蔵の石製香炉（写真1・図1）である。石製香炉は以前から「石造花文台」として九州歴史資料館に寄託されていた。しかしこれまで同様の類例も国内にはなく、その年代、用途などについても不明であったことから、収蔵庫にて大切に保管されていたものである。

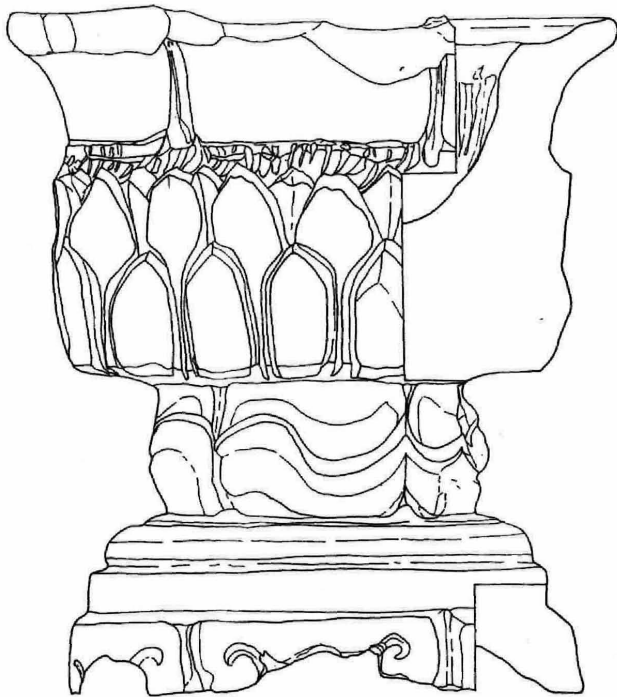


【写真1】太祖神社所蔵石製香炉。  
（写真提供：井形進氏）

「大陸系の石造物ではないか」と井形進氏に教えていただいたのは、小郡市に九州歴史資料館がオープンして間もなくのことであった。近年、薩摩塔や宋風獅子などの石造物の研究を機に、九州での大陸系石造物の

研究が進み、少し前までよくわからなかった石造物のなかに、大陸に起源をもつものが少なからずあることが判明してきている。井形進氏も薩摩塔や宋風獅子などの大陸系石造物の研究の過程で、この石製香炉について大陸系の石造物ではないかという見解をもたれていた。<sup>②</sup>

その後、井形氏と実見を重ね、石製香炉についての調査を進めてきた。ここでは、



【図1】太祖神社所蔵石製香炉 実測図(S=1/3)。



【写真3】首羅山遺跡の薩摩塔（西塔）。



【写真2】香炉の内面。



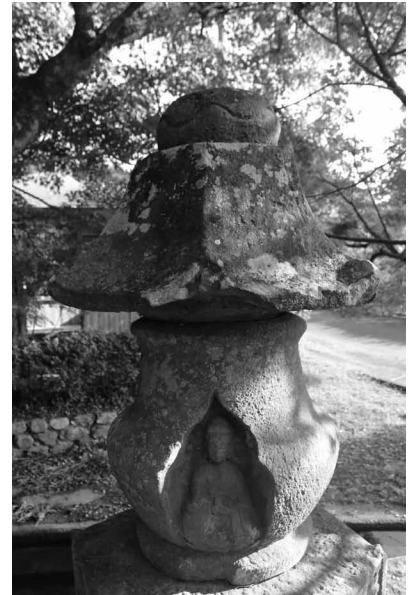
【写真4】くびれ部。



【写真7】南宋石刻公園の石塔。  
(写真提供：井形進氏)



【写真6】油山山麓の薬師堂の石塔。



【写真5】水元神社の薩摩塔。

その成果として太祖神社所蔵の石製香炉について報告するとともに、若杉山周辺の大陸系の遺物について概観しておきたい。

### 一 石製香炉について

太祖神社所蔵の石製香炉は器高二五・二cm、残存する口径二二・四cm、底径一八・六cmである。全体的に灰白色を呈する。台座は段を有し、蝶足と呼ばれる六つの脚をもつ。その上には球状の太極文を組み合わせたような形状のくびれ部をもち、その上に二段の蓮弁を配する。蓮弁の上部には蕊を表現している。さらに六枚の花びら状の彫刻を施している。上面は浅い碗のように彫りこまれている。彫りこみの内面は粗いノミ痕が残り、煤が付着している(写真2)。

石材については肉眼観察のみしか行っていないが凝灰岩ではないかと考えている。同様の石製香炉は、現状では国内での類例を知らないが、細部の彫刻についてはいくつかの類例を上げることができる。

まず、全体的なつくりである。正面となる面の彫刻は丁寧であるが、背面の仕上げが正面に比べて粗いつくりとなっている。こうした点は、例えば箱崎の恵光院の石造の十一面観音像など<sup>3)</sup>、大陸系の石造物にしばしば見られる特徴である。

蝶足は、恵光院の石造の十一面観音や薩摩塔の脚部(写真3)に類似する。薩摩塔とは薩摩地方ではじめて発見されたことからこの名で呼ばれる。鹿児島県坊津周辺、長崎県平戸市周辺、福岡県周辺に偏在する南宋期の大陸系石塔である。

球状のくびれ部の文様(写真4)については、鹿児島県南九州市水元神社(写真5)や神殿の薩摩塔の頂部などに似た文様を見ることが出来る。福岡市西油山の薬師堂にも類似する石造物がある(写真6)<sup>4)</sup>。また、年代はよくわからないが中国でも南宋石刻公園の石塔に類似したものがある(写真7)<sup>5)</sup>。西油山の薬師堂の石造物

は笠は後補であるが、球状の頂部の下に蓮弁を配したつくりは、南宋石刻公園の石塔に類似している。

蓮弁の表現も中国南宋石刻公園の石塔(写真7)に類似し、福岡市堅粕馬頭観音の薩摩塔の台座に刻まれた蓮弁(写真8)にも通じる。さらに蓮弁上部の蕊の表現は博多出土の中国系瓦などで強調して表現されるものである(写真9)。

また、石造物ではないが、鹿児島県一乗院所蔵と伝えられるの蓮華形香炉も類例としてあげておきたい。六層の蓮弁をもつ白磁の香炉である。

以上のように、太祖神社所蔵の石製香炉は、南宋期頃の大陸由来の遺物に通じ



【写真9】博多遺跡群出土中国系瓦。  
(写真提供：福岡市埋蔵文化財センター)



【写真8】福岡市堅粕馬頭観音の薩摩塔。

る特徴を持つことから、中国で製作された石造物であると考えられる。

## 二 若杉山と太祖神社の概要

ここで、若杉山（写真10）と太祖神社（写真11）の概略について触れておく。太祖神社のある若杉山は、標高六八一m、福岡平野の東、糟屋郡篠栗町と須恵町にまたがる。大宰府政庁を包むように弓なりに連なる三郡山地の東に位置する。篠栗新四国八十八か所の霊場として今も信仰を集めている。

若杉山の名のおこりは、神功皇后が朝鮮半島に出兵する際にこの社の神木として杉を枝を折つて鎧にさし、諸神のご加護を祈ったからだと言えられる。戦に勝利した神功皇后は生色を失わなかった杉の枝を香椎宮のそばに植え、これが綾杉として茂り、その分け植えの故事によって「分杉山」となり、それが「若杉山」になったという伝承がある。今も太祖神社上宮の社殿の横に神功皇后の像が祀られている。



【写真10】若杉山と米ノ山（久山町方面より）。

神功皇后の伝説は若杉山周辺に多く残っており、若杉山山頂付近からの絶景からも、この地が海を臨んだ重要な場所であったことがわかる。

伝承によれば養老年間、奈良時代頃にインドの僧侶善無畏三蔵が若杉山に來山し、聖武天皇のころ、延年寺太祖山三蔵院という宮寺が建てられたと伝えられる。若杉山に伝えられる千手観音立像は九世紀に遡るとされ、この山が平安時代前期から、霊山であったことを示している。



【写真11】太祖神社上宮。

満山の山伏の峰入りのルートとなり、宝満山の亀石坊宥弁が再興し、石泉寺のなごれをくんだ石井坊などが修験の重要な拠点とされていた。

江戸時代に書かれた「郷社太祖宮見取図」によると、山頂に太祖宮上宮、中腹に石井坊や若杉山観音堂、山麓に太祖宮下宮がある。坊跡も広範囲に広がっている。

山麓の太祖宮下宮横の若杉肥前谷遺跡の調査では、平安時代末期から鎌倉時代の貿易陶磁器や大型のコンテナと想定される甕などが出土しており、当時の山中の様子の一端を知ることができる。<sup>6)</sup>

## 三 若杉山周辺の大陸系の遺物

若杉山とその周辺には大陸系の石造物をはじめ、大陸に由来する特徴的な遺物が確認されている。<sup>7)</sup>

石製香炉が確認された太祖神社には、宋風獅子が一對と、一体（一對のうち一体は所在不明）がある（写真12）。宋風獅子とは石造の獅子像で、現状では十数基が確認されているのみである。鹿児島県や岡山県でも確認されているが、多くは北部九州に偏在する大陸系石造物である。宗像大社所蔵の宋風獅子に刻まれた建仁



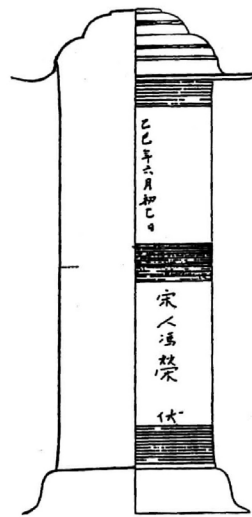
【写真 12-2】太祖神社所蔵宋風獅子(1 軀) (『山の神々—九州の霊峰と神祇信仰—』九州国立博物館・2013 年より)。



【写真 12-1】太祖神社所蔵宋風獅子(1 対) (『福岡の神仏の世界』九州歴史資料館・2014 年より)。



【写真 12-3】太祖神社所蔵宋風獅子(1 軀) (『山の神々—九州の霊峰と神祇信仰—』九州国立博物館・2013 年より)。



〔天治銘銅經筒の銘文〕  
乙巳年六月初乙日  
(天治二年)  
宋人馮榮 伏  
(凡そ一行分書)  
(この行馬形り)  
(以下書)  
執筆僧源淋  
覺(この行全部で凡そ五字)  
禪宗延範 覺  
弟子鄭森  
天治三年 丙午 辛未  
勸進僧經尋  
散位藤原朝臣末貞  
(凡そ四字)

【図 2】天治 3 年 (1126) 銘の經筒 (『第 1 回九州山岳霊場遺跡研究会 北部九州の山岳霊場遺跡資料集』2011 年より)。



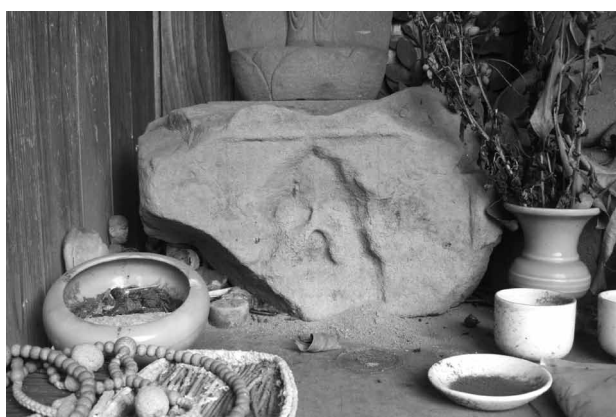
聖徳太子 傳教大師 十方佛土中 唯一乘法 無二亦无三 除方便說 妙法蓮華經 諸行无常 是正滅法 生滅已 寂滅已 乘 弘法大師 聖空上人  
 奉讀妙法蓮華經一萬部 右妙法蓮華經之志願凡此經者宿願大正和三年七月十五日筑前國於善徳社始之同國於善徳山上宮續敷十部正二年天台院有智山末寺於左谷山寶鏡院所令結願也仰願者歡迎多寶菩薩賢文殊山王三聖太祖八幡十羅刹女當所親善為妙蓮華無始罪障生都奉書上超煩惱性海達淨刹之聖別過去二親并唯願等諸靈成得道無疑雖私信誓天長地久御願成就仍錄之願如件  
 留始後共期佛惠 正中二年乙丑七月十五日 讀誦聖人大乘妙蓮華敬白 時院主西國軍定坊奈海 大檀那 藤左衛門入道茂利 大藏院空弁比丘尼道性坊 性明坊定房此外經 坊

【図 3】正中 2 年 (1325) 銘の板碑 (『第 1 回九州山岳霊場遺跡研究会 北部九州の山岳霊場遺跡資料集』2011 年より)。





【写真13】建正寺。



【写真14】若杉乙犬層塔。



【写真15】太祖神社所蔵滑石製石鍋の未成品。

現などにも宋の影響が見て取れるという指摘もあり、大陸の影響を受けた遺物がある点も重要である。

石製香炉とともに九州歴史資料館に寄託された資料のなかに、滑石製石鍋の未成品に類似する資料がある(写真15)。滑石製石鍋は中世以降、長崎県西彼杵半島などを中心に大量生産されるものである。I類といわれる瘤状の取手をつくり出す古い段階の石鍋の分布をみると、太宰府や喜界島、五島列島などの、大陸との交易と深く関わる地域にのみ集中して出土する傾向がある。太祖神社所蔵の石鍋の未成

元年(一二〇一年)奉納銘から南宋期のものと考えられている。

若杉山佐谷では現在の建正寺(写真13)付近に経塚がつくられ、そこから出土したと伝えられる出土品に「天治三年(一二二六年)」「宋人馮榮伏」「弟子鄭」など中国人銘が線刻されたものがある(図2)。佐谷には正中二年(一二三二年)の法華経願文が刻まれた石碑が現存する(図3)。宮崎で法華経一万部を読み始め、若杉山上宮で数千部を読み、佐谷山賢聖院(有智山寺末寺)で結願したとされる。この石碑から、賢聖院が有智山寺(宝満山)の末寺であったことや、大陸との関係が深かった宮崎宮との関係が示唆される点で重要である。

麓で発見された若杉乙犬層塔の部材(写真14)も大陸系の石造物である。これは、方形の石塔で、一辺の中央に尊像が刻まれ、格子状の彫刻がある。

また、右谷の石井坊所蔵の十二世紀の不動明王立像などにも腰回りの彫刻の表

品は、瘤状の取手も二か所と典型的な四耳と呼ばれるタイプとは異なる形状をしている。しかしながら、若杉山が滑石の産地であり、向ノ山経塚での滑石製経筒やI類の滑石製石鍋の未製品なども出土しており、古い段階から滑石製品をつくらせていることが判明している。また太祖宮所蔵の未製品は、遺された最終調整の縦方向のノミ痕が、I類の滑石製石鍋の調整に似ている点など、古い段階の石鍋の未製品で可能性が高い。

石鍋製作跡は若杉山の北側に位置する首羅山にもあり、この二つの山が大陸と深く関係した山林・山岳寺院である点も注意しておく必要がある。

#### まとめ

以上のように石製香炉が発見された若杉山太祖神社周辺には大陸由来の特徴的

な遺物が確認されている。

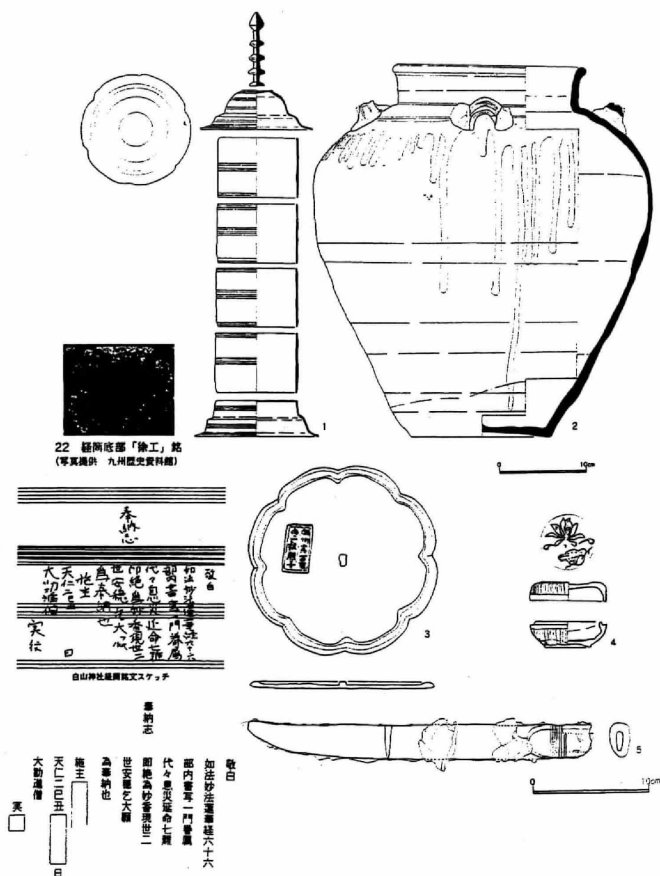
若杉山の麓を流れる多々良川とその支流の流域では、近年七世紀から八世紀の粕屋町阿恵遺跡で倉庫群や政庁跡などが発見され大きな話題を呼んでいる。また越州窯系の遺物が多く出土する多々良込田遺跡でも倉庫群が発見され、多々良川河口やその流域は古代より交易を中心とした重要な役割があったことが判明している。博多綱首の名を墨書した土器が出土する香椎B遺跡や、鎌倉時代に大友貞宗によつて建立され円覚経を開版した顕孝寺がつくられるなど、中世になると大陸の影響がさらに顕著に見られるようになる。

さらに若杉山の北側には国史跡首羅山遺跡がある。首羅山遺跡も平安時代後期から中世前半を最盛期とした山林寺院であった。首羅山の本谷地区や西谷地区の中心部からは、若杉山が遥拝できる。また、若杉山の尾根伝いにある米ノ山の山頂からは首羅山遺跡がよく見える。

首羅山山頂出土と伝えられる白山神社経塚出土遺物(図4)のなかに天仁二年(一一〇九年)銘の四段積上式経筒があり、底面に宋人名と考えられる「徐工」の墨書がある。また、薩摩塔二基(写真3・図5)、宋風獅子一對が現存している。本谷地区からは高麗青磁印花文香炉や景德鎮産青白磁刻花文深鉢など十二世紀後半から十三世紀にかけての貿易陶磁器の優品が出土する。また、首羅山には悟空敬念という大陸で参禅修行した渡海僧が入山している点も重要である。悟空敬念は、撰政近衛兼平との師弟関係があり、執権北条時頼との面談もあるなど、幕府と通じた禅僧であった。さらに博多と密接な円爾系統の禅宗勢力に所属しており、悟空敬念の入山の記録は、首羅山が大陸と深く関係する山であることを示している。このように近年の福岡平野周縁の山々の調査・研究によつて、山林・山岳寺院のなかには、特に大陸系の特徴的な遺物が出土したり、渡海僧の入山の記録があるなど、大陸色の強い山があることがおぼろげながら見えてきている。若杉山は渡海僧の入山の記録は見られないものの、山中に遺された大陸由来の遺物や、正中二年の



【図5】首羅山遺跡の薩摩塔(西塔)  
(S = 1/12)。



【図4】白山神社経塚出土遺物 (S = 1/10, 1/6)。



板碑の銘文の内容などから、有智山寺（宝満山）や宮崎宮の別院を通じて大陸と密接に通じていたことが想定されるのである。

以上のことから今回報告した石製香炉は、当時の大陸と若杉山の往来を示す特徴的な遺物の一つであるといえる。このような大陸の遺物が山に入る背景には、禅僧だけではなく博多綱首と呼ばれる中国人商人との関わりもあつたであろう。そうした人々がどのように山々に関わっていたのかは未だ見えていない。今後も更に山々に遺された遺物を再精査し、検討を加えていきたいと考えている。

#### 【服部先生と首羅山遺跡】



【写真16】首羅山遺跡調査指導委員会の現地視察。座って板碑を読んでいる服部先生（平成17年）。

服部先生に初めてお会いしたのは、首羅山遺跡の調査の立ち上げの時でした。なにせ当時は全く無名の荒山だった首羅山でした。断られるのを覚悟で指導委員会の副委員長のお願いがかりでしたが、あっさりお受けいただいたのを今でも覚えています。それからすでに十年、あの荒山が今は国史跡になりました。服部先生ははじめの頃から「対外交渉がポイントだね」「国史跡にはなるよ」とおっしゃっていました。先生の予言は的中しました。お忙しいなか、無理を言つて町内の聞き取り調査もお願

しました。先生の調査に同行させていただくなかで、そこに住む人々と関わることの大切さを学ばせていただいたのが、私にとっては大きな転機となりました。それが今の地域や学校と一体となった首羅山の調査や活用の基礎になっています。改めて感謝の気持ちでいっぱいになりました。聞き取り調査の成果は、本書の編集に携わられている貴田潔氏のご尽力のおかげで『久山の景観とくらし』として刊行しました。古い地名の地図なども作成し今の調査・研究の基礎となっています。着眼点を少し広げたり、視点をかえることで新しいことが見えてくることも教えていただきました。薩摩塔や宋風獅子の研究や首羅山遺跡の調査はまさにそうした視点が必要でした。

遺物に真摯に向き合っていくと、今回報告させていただいた石製香炉のようによくわからなかったものの姿が、次第に明らかになっていき、またそこから新たな疑問も湧いてきます。こうした「再発見」の過程はとても楽しいものです。そうしたご報告をするたび

「歴史はおもしろいんだよ」

服部先生はにこりと笑つてそうおっしゃいました。

脱稿際に先生にお送りいただいた『蒙古襲来』を拝読させていただき、まだ見えていない歴史がたくさんあることを改めて感じ本当に歴史はおもしろいなあと思いました。

六郷満山の回峰行のお話しや山登りのお話など、研究以外のお話しなどいろいろも楽しそうにされています。ある年の委員会のあと、服部先生と桃崎先生と蛭を見にいきました。猪野川や久原川をはしごしました。猪野では天照皇大神宮のすぐ下の五十鈴橋のところは今までに見たこともないようなたくさんの蛍が飛んでいて、とてもきれいでした。これも楽しかった思い出のひとつです。この前の委員会では、猪野を再度視察し、びよんびよん橋を気に入っていただき、「今度は桜の季節に花見だ

ね」とおっしゃられていました。お時間できましたらお花見や山登りも一緒にさせていただきます。

本当にお疲れ様でした。そして首羅山遺跡ともどもこれからも末永くよろしくご指導お願いいたします。

- (1) 九州歴史資料館『福岡の神仏の世界―九州北部に花開いた信仰と造形―』(二〇一四年)。
- (2) 井形進『薩摩塔の時空』(花乱社、二〇一二年) など他。
- (3) 末古武「福岡恵光院灯籠堂の石造十一面観音像―南宋彫刻の可能性と図像の検討―」『福岡市博物館研究紀要』(二〇一二年)。
- (4) 大庭康時氏に現地をご案内いただきご教授いただいた。
- (5) 井形進氏よりご教授いただいた。
- (6) 篠栗町教育委員会『若杉肥前谷遺跡』篠栗町文化財調査報告 第五集(一九九九年)。
- (7) 桃崎祐輔「第一章 糟屋郡域の考古資料にみる中世社会の成立過程と対外交渉―山岳寺院・仏像・経塚・石造物―」『福岡大学考古資料集3 福岡県若杉山麓における中・近世考古資料の調査』(二〇一〇年)。
- (8) 服部英雄「首羅山、背景の宋人社会と禅宗化」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告 第一六集、二〇一二年)。
- (9) 前掲注1に同じ。
- (10) 夏木大吾「第三章 糟屋における中世滑石製品の調査成果」『福岡大学考古資料集3 福岡県若杉山麓における中・近世考古資料の調査』(二〇一〇年)。
- (11) 前掲注8に同じ。
- (12) 伊藤幸司「悟空敬念とその時代」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告 第一六集、二〇一二年)。

(久山町教育委員会)